

# サミュエル・ジョンソンの思想： その分析と再構成

——信仰について——<sup>1)</sup>

石 井 善 洋

(受付 2002 年 5 月 10 日)

ジョンソンが希望論で論じていたことは、現在という時間の価値を認識し、今果たすべき仕事を確実に果たせということで、つねに現在を主題にしていた。たしかに、彼岸の側から現在を見るという視点もあったが、それは生のはかなさを知るという意味であり、やはり彼の視線は現在に注がれていたと言える<sup>2)</sup>。ジョンソンは、未来は神が人間に与えることを悦ばない、不確かな領域だと考えていたのである。

ところが、信仰に関する彼の所論を見ていくと、ひとつの疑問に遭遇する。ジョンソンは、「宗教の教えによって生きていこうとする人の大いなる務めは、現在よりも未来を優先して、神意に従うことの大切さ、徳に約束されている報酬の価値、そして罪に対して宣告されている罰の恐怖を心に刻みつけ（中略）ることである」（R. 7. 7, III. 37-8）と言い、「未来を優先」せよと言明する。しかし、これまでの彼の所論をふまえるなら、この主張には少なからず戸惑いを覚えると言わざるを得ない。なぜなら、ジョンソ

1) テキストには *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson* を用い、*The Rambler* を R、*The Idler* を I、*The Adventurer* を A、*Rasselas* を Rsl と略記して出典を記す。文中に（R. 43. 2, III. 232）のようにあるのは、*The Rambler*, No. 43, paragraph. 2; *Yale Edition*, Vol. III, p. 232 の意味である。また James Boswell 著、*Life of Johnson* は、Oxford UP の *The World's Classics* 版を用い、*Life* と記す。その他の出典についてはそのつど文中に明示する。

2) 詳細は拙論「サミュエル・ジョンソンの思想：その分析と再構成——希望について——」（*広島修大論集* 第41巻 第1号(2) 人文編 2000年9月 広島修道大学人文学会）を参照。

ンは、「未来については何も知りえない」(Rsl. XXX, XVI. 112) という認識に立って、現在の価値を力説していたにもかかわらず、信仰については態度を変えて未来を優先する。それは一方で未来は不確かであると語りながら、他方では確かであると語ることであり、そこに矛盾を見ないわけにはいかないからである。

もし信仰が聖域であり、論すべき対象でないなら、ここから先はジョンソンを敬遠しなければならない。しかし、ここであえて信仰をテーマに取り上げたいと思うのは、彼の精神の中でこの相反する主張がどのように折り合っているのか探ることが可能だと思われるからである。小論では、ジョンソンの道德論に含意されている問題点を整理し、それが信仰にどのような性質を与えているのかを調べ、そこから浮上する彼の信仰のすがたをとらえてみたい。そして彼の希望論と信仰論の整合性を確認してみたいのである。

## 1. 偶然の支配

はじめに、これまでの論考をふりかえって、彼の道德論に含意されているもっとも重要な問題を指摘してみたい。

第一に、ジョンソンは、行為の結果は努力の程度に比例する、と信じていた。これは学問論をはじめ、希望論一般に共通して表明されていた信念で、努力は必ず報われる、ゆえに怠りなく努力すべきである、という形でくりかえし主張されていた。第二に、しかるに、未来の希望はいまだ一つの幻想にすぎず、現在の行動をうながす力に乏しい。また行為には倦怠がともなうので、やがて人間は未来の夢にあそぶばかりで、いま現在の努力を怠るようになる、という人間性批判があった。これは時間の性質と未来の茫漠さからくる人間性の弱さを論じ、あるべき時間の認識を説こうとしたもので、「努力は必ず報われる」という彼の信念と矛盾するものではない。そして、第三に、ジョンソンの著作全体に、たびたび不協和音のように聞こえてくるのが、人間的な事象は偶然に支配されている、という考えであ

る。しかし、これを字義通りにうけとれば、希望一般に関するジョンソンの信念を脅かさずにはおかないはずである。

ところが、ジョンソンの所論を見れば、彼の道德論は偶然の支配を前提にしていたことが分かる。たとえば、才能の開発や職業の選択について、ジョンソンは運命論的な才能観を認めずに、対象との偶然の出会いを強調し、目標に努力を傾注する程度において、才能は開花し、仕事は成功すると考えた。道德的な行為も同様で、偶然の支配を前提にしているから、継続的な善への意志、勤勉と努力を力説するのであった。言い換えれば、ジョンソンの道德論の本質は、きまぐれな偶然の力に抗する意志の力を説くことにあったのである。

しかし、偶然の支配という議論の前提は、彼の信念を裏切らずにはおかないはずである。偶然がこの世を支配しているとすれば、あらゆる意志の結果さえ翻弄せずにはおかない。結局、善人の努力は報われるのだろうか。ジョンソンの信念では、必ず報われるはずである。彼は著作のいたるところでそう主張している。しかし、論理の必然性によって、そうだとは限らない、とも言わざるを得ないのである。たとえば、「善人でさえ、他人の罪ゆえに苦しむ危険から、決して免れていない」(I. 120. 10, II. 469)、「善人も、他のすべての人同様、あらゆる天災の影響を免れがたい」(I. 120. 11, II. 469)と。偶然の支配は、ジョンソンの道德論の前提だったが、彼の信念はそのために不安にさらされるはずである。では、彼の信念のゆくえはどこにあるのか。

この問題への回答を、彼の道德論の中に見出すことはできない。彼の道德観が根を下ろしている信仰に、どうしても立ち入らなければならない。しかし、信仰に関する所論においても、直接的な回答を見出すのは困難である。なぜなら、ジョンソンは、自分の所論にここで指摘するような矛盾がふくまれているとは考えてなく、したがって何ら回答を用意していないからである。上記の引用も、矛盾があるという文脈ではなく、まったく別な意図で語られている。問題は、その意図がどこにあるのか見定めることで

あるが、そのためにはまず、彼が信仰の必要性を説く議論を検討してみなければならぬ。

## 2. 信仰の必要性

ジョンソンが信仰の必要性を説く理由は大きくいて三つある。一つは時間と希望に関する人間的な性によるものである。ジョンソンは、人間は人生の最盛期においてさえ、未来の幸福を当てにしなければ十分な満足を得ることができないと考えている。現在は速やかに流れていく、きわめてとらえがたい瞬間だから、いま期待できる慰めは、過去の回想か、未来から借用したものしかない。しかし、記憶が悦びとする過去の出来事や行為はすぐに思い起こされ、たちまち尽きてしまう。あとに残るのは心に深く刻まれた苦い思い出ばかりである。よって、人間の目は、どのような形にでも自由に変えられる、まだ来ぬ未来へむけられる。

この議論において、信仰の必要性がはっきりするのは、死の影がちらつきだした老齢にいたった場合である。年齢の衰えが死をもって完結するのは火を見るよりも明らかである。したがって未来から借用するしかない慰めは、死によって完全に絶たれるはずである。しかし、それが終焉ではない。ジョンソンの見るところ、人間は現在があるかぎり未来を夢想する。希望は死後さえも現在の慰めの材料とするのである。死後に対する希望は、そもそも論理的な根拠をもたない、きわめて恣意的な願望の投影である。しかし、ジョンソンは、願望に微睡む人間的な弱さに警戒しながらも、未来に希望を見ようとする人間性は受け入れざるを得ない。ジョンソンが信仰を肯定する議論は、このような人間的な性に由来している。

二つ目の理由は、信仰が現世を意味づけ、苦悩に耐える力を与えてくれる、ということである。つぎの例を見よう。

かく苦しむもので、「人に命と不死を明るみ」に出した福音に、助けを求めない人はいないはずである。宇宙の法則が必然とすることに耐えよ、と教えるエピキュラスの格言は、われわれを黙らせるかもしれな

いが、満足はさせない。外的事象に無関心であれ、と命じるゼノの教えは、われわれに悲しみを隠そうとさせるかもしれないが、和らげはしない。(中略) 自らの死に対して合理的な平穩を得るのは、生死をその掌中におかれているお方の約束と、すべての涙がぬぐわれ、全魂が歓びで充たされる、つぎのより優る生への確信によってしかあり得ない。哲学は頑迷を吹き込むかもしれないが、ひとり宗教だけは忍耐を授けることができる。(I. 41. 13, II. 130-1)

ジョンソンは、エピキュラスやゼノの教えのように、生の内側から生を教える哲学には、生の意味を教えることができないと考え、その点から宗教と哲学の優劣を論じようとしている。彼は来世の存在を想定することで、いわば生を相対化し、そこに意味と目的と秩序を与えようとするのである。また興味深いのは、信仰を頭ごなしに説くのではなく、一つの価値として提案している。しかも相対的な価値から絶対的な価値へ高めようとしている。「より優る生への確信」、すなわち信仰を、自ら生に「満足し」、生への「悲しみを和らげ」、人生を生き抜くための「忍耐」を得る手段だと、相対的に位置づけているが、それが「死に対して合理的な平穩を得る」たった一つの方法だと説くことによって、絶対化しようとしている。信仰は、偶然に翻弄される現世を意味づけ、苦悩の意味を解き明かす唯一の方法だというのが、ジョンソンがとなえる、信仰が必要な二つ目の理由である。

三つ目は、神の正義と慈悲を理由とする。ジョンソンは、古来、道德家は、「不幸が無差別に、普遍的に配分されているという事実」から、来世の存在を証明してきたと言う。「現世の諸事が善人にも悪人にも区別なく起こるのだから、至高の存在者の正義からして、当然、来世は存在しなければならない。そこで正しい酬いが与えられるはずなのである。人はみなこの世の行いに応じて、幸福になったり不幸になったりする」(I. 120. 12, II. 469)。また、「人生の不幸は、神の慈悲に照らしてみても、ある程度は来世の存在を証明する」と言う。「神の無限の善意」が、現世の悦びをつねに享受できる存在や、つねに不幸な存在を創り出すなど、彼にはまったく想像できな

い。現在不幸にあえぐ人は、「より高貴な、よりよい何かに予定されているはずなのである。幸福を感じるあらゆる能力がみだされ、だれしも自分の過ち以外の原因で、悲惨な目にあうことのない日が、必ずくるはずなのである」(I. 120. 13, II. 469-70)。

ジョンソンは、「不幸が無差別に、普遍的に配分され」「現世の諸事が善人にも悪人にも区別なく起こる」こと、言い換えれば、この世の諸現象の無目的性が、倫理的な価値とそれに伴うはずの幸福を無化している、と考えるのである。そして苦悩を、「この世の行い」、すなわち、徳を条件に、来世の存在と幸福を信すべき理由だと論じている。徳が報われるためには来世の存在が必要なのであり、そのためには神の正義と慈悲に信頼するのである。

以上の三つの理由は、信仰の動機づけとしてはたしかに有効かもしれない。が、はじめに指摘した矛盾が、この議論によって解消されているかどうかは、やはり疑問だと言わなければならない。なぜなら、もしジョンソンのように偶然の支配を事実だと認めるなら、いかなる信頼も想定も、そのためにやはり否認されうるからである。繰り返しになるが、偶然の支配はジョンソンが道徳論で前提としていた真実である。その真実にもとづきながら、未来を信頼する別な真実をとええることは、自家撞着に陥ることである。

ジョンソンの信仰論に見られる特徴は、人間性の現実を受け容れて、論理を問おうとしないことだと言える。それよりも、人間性のうながす傾向に倫理的な要請をくわえて、一つの価値の体系をつくろうとする。人間の本性を理解し、そのあらがいがたい傾向に根差しながら、よりよく生きていこうとするのである。偶然の支配という、矛盾にみちた現実に対しては、唯一可能なすじの通った解釈を探ろうとする。ジョンソンは論理的なすじみちをとって矛盾を引きうけるよりも、信念にもとづく別種のすじみちをとって矛盾を拒むのである。彼が未来は知りえないと断定しながら、著作のいたるところで「墓地の向こうには徳と敬神によってしか至ることができない未来がある」(R. 69. 12, III. 367) と断言するのは、彼の内面でこの信念が他の論理を圧倒しているからである。そこでは、しかしながら、道

徳的な信念が、いわば来世の存在と幸福を要請していると言える。来世の存在がなければ、偶然に翻弄される生は理不尽であるという、痛烈な悲憤から来世への期待を物語っている。こういう姿勢は、論理的だとはいえないが、逆に不合理だともいえない。人間は希望をいだかざるをえない存在であり、死をこえる未来への希望は、生前の徳をよすがとするほかに手段がない。このような、人間性に寄り添った立場を理解しさえすれば、それを合理的だと言うことはできる。しかしながら、問題とせざるを得ないのは、ジョンソンが、これが生に関する唯一の解釈で、理性が解き明かす「真実」だと考え、論理的な問題には一切触れようとしないことである。

### 3. 真実の解釈

ジョンソンは信仰に関する一連の内容を、その論理性ではなく、合理性のゆえに真実だと見なす。彼の宗教家という立場からすれば、そこに疑問の余地はないのかもしれないが、偶然の支配から説き起こし、未来一般の不可知という可能性と、道徳的な信念の要請という特徴を見てきた以上、彼がとなえる真実がいかなる性質のものなのか、あらためて調べてみる価値があると思われる。事実、真実について、ジョンソンには一種独特な解釈がある。彼の信仰論を理解する上で、見落とすことができない考察がふくまれている。

ボズウェルは、真実について、ジョンソンに二通りの見方があったと記している。ジョンソンは一つを「物理的な真実」と呼び、もう一つを「道徳的な真実」と呼ぶ。

物理的な真実とは、事物をありのままに語るときをいい、道徳的な真実とは、見たままに、誠実に、正確に語るときをいう。しかじかの者が道を渡った、と私が言うとき、もし本当にそういう者が渡ったのなら、私は物理的な真実を語ったのだ。が、もし私が、間違っているかもしれないが、そう信じたのなら、私は道徳的な真実を語ったのだ。  
(*Life*. 1069)

物理的な真実と道徳的な真実という言葉は、ボズウェルが『ジョンソン伝』に記録した言葉であり、ジョンソンが自著で使っている言葉ではない。しかし、このふたつの区別は、ジョンソンがとなえる真実の特徴を如実に物語っている。注目したいのは、道徳的な真実の方である。ジョンソンは、要するに、客観的な真実とは別な真実がある、と信じているのだ。この真実を保証するのは、観察や証明ではなく、誠実と確信である。しかし、観察にも証明にもよらない真実を、誠実と確信が保証するというのは、きわめて意味深長な結論を招来する、と言わざるを得ない。それは、信じることによる真実、つまり、確信と信頼が要請する真実だと言えるからである。おそらく、ジョンソンの信仰の形成は、ここから説明することができる。前節で見た信仰の特徴に当てはめて言えば、道徳的な信念（確信）が、誠実をともしなうはずのものであれば、来世への信頼と信仰はまぎれもない真実となるはずである。また、引用の口吻から推すと、道徳的な真実は、その重さにおいて、物理的な真実と変わるところがない。物理的な真実は、「事実」という言葉で置き換えられるはずだから、来世への信頼と信仰は、偶然の支配という「事実」と、対等かそれ以上の位置を要求する真実となりうるのである。このように、来世に約束されている幸福への期待は、偶然の支配によって論理的に否認しうるにもかかわらず、道徳的には真実なのである。ジョンソンの信仰論にはこのような考え方がひそんでいる。この思想は、しかし、人間が真摯に求めるものは、なんであれ真実だと結論しうる、特異な論理だと言わなければならない。

道徳的な真実が論理的な推論と矛盾しない理由は、つぎの引用からも推察することができる。

相矛盾するものが（中略）ふたつともに正しいことはありえない。しかし人間に属することならば、ともに真でありうるかもしれない。多様性は矛盾の謂ではない。(Rsl. VIII, XVI. 33)

ジョンソンは、矛盾は論理的な整合性が求められるところに生じる、と考



えているようである。人間の思考には整合性が求められ、したがって矛盾が生じうる。しかし整合性を人間性に求めることはできない。人間性は平面ではなく、球体か多面体のようなもので、人間はさまざまな面で考えるところ、求めるところがあり、それらはそのそれぞれにおいて真なのである。そういう意味で人間性は多様である。この多様性から任意のものを切り離して、つき合せてみれば、矛盾しているかもしれない。しかしそれでは生きた人間を論じたことにはならない。それは人間性とは無縁なただの論理なのである。このような人間性の全面的な肯定が、ジョンソンに論理的な真実と道徳的な真実を区別させ、矛盾を生じさせない理由ではないかと考えられる。

しかし、ジョンソンは、人間性にも一つだけ問うべきものがあると考えている。それは倫理的か否かである。人間性は、そのあるべき方向性という意味では、強い倫理性を問うべきである。倫理的な要請こそ人間性に対して問える論理だと言えるのである。この意味において、ジョンソンは、倫理と論理をほぼ同じ意味でとらえている。またその論理にかかわる正当性を合理的という言葉で表わしている。ただ、問題なのは、人間性に限定して適用すべき論理を、ジョンソンが真理一般に適用しようとしていることである。つぎの引用にその姿勢が表われている。

しかし、思索に一生を費やし、真理の発見だけに努める者が、なぜ想像力の妄信を改めることができないのか、なぜ偏見や癩癪を組み伏せることができないのか。(R. 180. 9, V. 184-5)

この引用は、前半の「しかし、思索に一生を費やし、真理の発見だけに努める者が」の部分を読むときは、「発見」という言葉から、その「真理」は何らかの客観性をもつ真理を意味しているように読める。が、後半の「なぜ想像力の妄信を改めることができないのか、なぜ偏見や癩癪を組み伏せることができないのか」の部分は、前半とは性質が異なる、多分に道徳的・宗教的な真理を示唆しているように読める。この性質のちがいは、大きな

意味で、物理的な真実と道徳的な真実のちがいに対応する。この文は二つの異質な真理の存在を示唆しているが、ジョンソンは明らかに一つの真理として語っている。いや、真理が一つでないことに憤りを感じている。真実とは道徳的な意味をもち、人生を規制すべきものであり、そうでないものを真実とは認めない。これが彼の偽らざる態度なのである。

ジョンソンは人間性にかかわらない真実を拒否しようとする。いや、もっと強引に、物理的な真実でさえ道徳的・宗教的な真実の方へ引きつけようとする。結論を言えば、彼が理解している真実の一つである。すなわち、普遍的・客観的な性格を色濃くもってはいるが、あくまでも道徳的な真実である。一例をあげてみよう。

清らかに生きよという主張がしかるべき力をもたないのは、それが吟味のうえ反駁されたからではなく、ろくに考えもせずに見すごされているからである。タリーの、もし「徳」が目に見えれば、「徳」は愛されるにちがいない、という見解に加えて、もし「真実」の声が聞こえれば、みな「真実」に従うにちがいない、と言ってもよい。(R. 87. 15, IV. 98)

ジョンソンは、「清らかに生きるべし」という規範に忠実なことを「徳」と見なし、さらに規範を「真実」と見なして、そこに普遍性と客観性を読み込もうとしている。「真実」は、耳を傾け、目を開きさえすれば、万人が認める、あたかも数学の定理のような、普遍的・客観的な道徳的規範として理解されている。実験や観察で明らかにされる、法則や事実としての真実とは領域を異にする、ありのままというよりは、そうあるべく要請された、だれしものが認めざるを得ない、人間の生き方を指すのである。

ジョンソンが道徳的な真実を見ようとするのは、人間の生そのものについてである。「人生をありのままに見るのが、大きな慰めになるかどうか私は知らない。しかし、もし真実があるなら、真実から得られる慰めは、確かであり、永続する」(Life. 240)。人生をありのままに見ることは、彼の思想の起点ではあったが、たしかに慰めではなかった。彼が見出したのは、偶

然の普遍的な支配という不可解な魔物である。彼は魔物の支配を認めようとしなない。だから「ありのままの」真実ではなく、別な真実を求める。そこから人生を再解釈し、価値の体系を築こうとするのである。その結果、「ありのままの」真実は、ある本質的な変貌をとげ、道徳的・宗教的な意味の中に吸収されていく。

#### 4. 偶然の解釈

偶然について、ジョンソンは興味深い解釈をほどこしている。そこで彼の思想の前提が変質していく様子を確認することができる。

彼は、人間を、どこかに安息の、しかし入港が許されるかどうか分からない港を求めて、嵐の海に船出した船にたとえている。彼らは途中で沈没する危険にさらされているだけではない。流星を恒星と間違えて針路を誤ることも、風向きが変わって航路からそれることも、未熟な舵取りで針路を失うこともある。しかしまたこのようなこともある、と彼は言う。「逆風が安全な岸に吹き寄せてくれることも。流星に引き寄せられて渦巻きに遭わずにすむことも。怠慢もしくは過ちが幸いして、まっすぐに進んでいれば避けられなかった災禍を免れることも」(R. 184. 11, V. 204-5) と。そして彼は偶然をこのように解釈する。

千もの危険がわれわれの頭上につきまとい、誰も自分の追求している善が偽装した悪かどうか分からず、つぎの一步が安全への一步なのか、破滅への一步なのか分からない、この遍く不確実な状態においては、合理的な心の平穩はこのような信念からしか得られない。すなわち、いかに現実の印象に惑わされようと、いかなるものも本当は偶然の支配をうけていない、宇宙はその創り主によってつねに監視されている、われわれの存在は全能の神の掌中にあり、われわれの目には偶然と見えることでも、最終的には親切な慈悲深い目的に向けられていて、自らを神の好意から排除しない人なら、結局何物にも傷つけられることはない、と。(R. 184. 12, V. 205)

おそらく、ジョンソンにとって、幸運は神の加護と信すべき恵みである。それ以外に幸運の意味は理解しようがない。しかし、ひるがえって考えてみれば、われわれは、不注意、怠慢、過失、無知、未熟など、事故や災厄の原因を説明し、責任の所在を明示する言葉はもっているが、幸運の理由を論理的に説明する言葉は、そもそももたないのではないだろうか。それは「幸運」と呼ぶしかない。そして、事の真相が「幸運」であれば、つまり、偶然が幸いしたということであれば、われわれの思考は論理的な領域には近づきえないのではあるまいか。たとえば、その人が僥倖に値する行為をしたかどうかなど、事実の周辺をめぐる憶測でしかないように思われる。そういう意味で、ジョンソンの理性主義が、災厄の原因を人間の性情や心理に求めることには成功し、幸運の理由を説明していないのは、ゆえなきことではない、と言わざるを得ないのである。偶然の意味を確率的な可能性とは別な、信仰の次元に求めようとする姿勢も、ゆえなきことではないのである。ジョンソンの考えでは、神の加護は人間の外から、偶然の衣をまとしてやってくる。論理的な説明のつかない偶然が、神の配剤に姿を変えるのは、決してむずかしいことではない。

しかし、このとき、無目的、無秩序を本質とする偶然は、神の摂理の中にふくまれて、目的と秩序を有する現象に変質する。ジョンソンは自らの思想の前提をはなれて、いま別なものを手にした。姿形は似ているが、実質のちがうものを手にしたのである。この変化の意味は何だろうか。ジョンソンは人間の理性を批判した文章に、「いまだ知らぬ未知の何かがあるかもしれないという理由で、既知の事実を否定しようとする者、承認された事実を仮定的な可能性で否認する者、そういう者を理性的な存在と認めるわけにはいかない」(Rsl. XLVIII, XVI. 171) と明確に記している箇所がある。しかるに彼は偶然の解釈において、まさしく未知の何かを想定して既知の事実を否認していないだろうか。これを理性的と認めることができるのかどうか疑問なはずであるが、彼は「合理的な心の平穩」はこのような解釈からしか得られないと説明する。これまでの考察では、このときの「真実」

は、論理と客観に属する真実ではなく、あくまでも解釈と信念にもとづく、誠実と確信に裏打ちされた、道徳的に要請された真実だとしなければならぬのであるが、おそらくジョンソンの思考の中では、客観的、普遍的な、だれにも否定しえない「真実」なのである。

ジョンソンの信仰論に見られる問題点をふまえれば、彼の信仰の形はつぎのように描き直すことができる。「偶然の普遍的な支配」と「神の支配」は、厳密には相並びえない。しかし、神が人間性に属する問題として語られるならば、つまり、解釈、必要性、選択、そして信念の問題として語られるならば、その限りではない。そのとき神は物理的・客観的な真実という次元からは後方に退く。しかし、後方に退くことによって、逆に「神の支配」は現世の相対化と意味づけを可能にし、人生に不動の目標を定めることができる。それが道徳的な真実として認識される。そして人生の意味と目標に対する信念は、真実に対する確信となり、それはそのまま神への信頼として認識し直される。不動の目標に真摯であればあるほど、真実に対してひたむきなものであり、それだけ神の絶対性が揺るぎないものとされていく。その結果、神の支配は偶然さえ下位に置き、偶然は全体的な秩序における一現象にすぎないと解釈される。たとえ人間に理解できなくても、すべては摂理にかなっているという世界観、宇宙観が誕生する。ジョンソンは、

ゆえに最期の深い憂いを活気づける慰めの光が差し込むとすれば、この世からではない。未来にはまだ可能性がある。われわれが目をもけさえすれば、病苦や衰弱の苦にあってもわれわれを支えてくれる幸福がまだのこっている。この幸福は自信をもって当てにしてよい。なぜなら、そこには偶然の力とはとどかず、心から望んで一心に求める人は、だれでも手に入れることができるからである。ゆえに、だれしも最後にはこれを頼るべきである。希望は人間の幸福の主たるものである。そして決して欺かないと確信がもてる希望こそ、唯一合理的な希望と言える。(R. 203. 12, V. 295)

と、未来の絶対的な希望、幸福の真のよりどころ、「唯一の合理的な希望」を高らかに謳い上げる。しかし、偶然の普遍的な支配から出発していたジョンソンに、それを否定する論理的な理由は何かと問いながら、さらに、彼自身が記している人間性批判の文、すなわち、「実際の経験がいまだ教えていない状態について、われわれは一瞥し、要点をとらえると、あとの部分は感情と空想で補おうとする。そのような探求では、あらゆるお気に入りの偏見、あらゆる生来の願望がわれわれを欺くのに忙しい」(R. 63. 7, III. 336) という一節を読むとき、「慰めの光」を発する国は、やはり現世の法則とは無縁な、道徳的な信念が要請している国である、と言わなければならないような気がする。それを神の国と呼ぶのは自由であるが、これまでの議論にしたがえば、希望の国と言う方が妥当である。そして、信頼の国である。また信念の国である。何に対する信頼か。自らの行為の正しさに対する信頼である。何に対する信念か。正しい行為が裏切られてはならないという信念である。裏返しに言えば、その行為をみそなわし、報いて下さる絶対的な力が存在するにちがいないという信念である。そう解釈せずして「合理的な心の平穩」を得ることはできない。偶然が支配している世界では、これが唯一可能な解釈であり、そう信じることが最大最善の道徳的な真実なのである。ジョンソンの諸説はそうように語っていると思われる。

## 5. 信仰から道徳へ

人間には理解できなくても、すべては神の摂理にかなっている。それは、ジョンソンの言葉では、神の意図は「詮索すべきではない」という表現に置き換えられる。

オランダの科学者、ヘルマン・ブールハーフェ (1668—1738) の小伝において彼はその理由を記している。ブールハーフェは神学、数学、医学、植物学とつぎつぎに学問を修めていき、経験と観察と実験を重んじて、事物の本質を数学的な方法で解き明かした。ジョンソンは、いまだ混沌たる学

間に秩序と明晰さを与えた学者として、ブールハーフェを高く評価している。しかし、宗教に関するかぎり、彼の態度はつぎのようなものであった。そしてこれもジョンソンの称賛するところなのである。

彼〔ブールハーフェ〕は神をあたかも自分のうちにあるかのごとく崇めたが、その本質を問おうとはしなかった。彼は神が自ら顕したところの神しか考えることを望まなかった。彼はそこで立ち止まり、私見をたくましゅうして想像で神を造り上げ、それにひれ伏すことで罪を犯さないようにした。彼は神の意志に、その決意の理由を問おうとせず、絶対服従した。そして、これをキリスト教徒の第一の、もっとも犯すべからざる義務と見なした。(The Life of Dr Herman Boerhaave, Samuel Johnson, The Oxford Authors, 1984, Edited by Donald Greene, pp. 69-70)

ジョンソンの信仰論が語るところをたどっていくと、最後には神の位置づけに立ち至るしかないと思われるが、信仰の内側からいえば、そこは踏み入ってはならない聖域のようである。彼は読者の行く手をさえぎり、「われわれは死せる魂がいかにあるか知る由もない。そのような知識はよき人生には必要ないのだ」(I. 41. 10, II. 130), 「人間の徳が真にあるべき領域は社会である」(R. 44. 9, III. 241) と言って、われわれの目を神や来世の考察から、「人間の徳」、すなわち、現世の道徳的な行為の方へ向けようとする。

神の命令の意図は、問うことも、思い描くこともできない。ただしたがうべきである。これが信仰から導かれる絶対命令であるが、実は、ジョンソンの論述の姿勢からも、同じ方向性を見出すことができる。彼の議論は現実の解釈からはじまり、現実の理不尽さを認めたうえで、それを解消する未来像を描くことだった。そういう意味で、彼はつねに現実をありのままに承認している。なすべきことは、その解釈だからである。

たとえば、苦悩について。苦悩は来世の幸福を約束する条件であるから、ジョンソンは現世の苦悩を否定しない。否定せずに、解釈し、意味づける。例をあげれば、「このように苦悩が幸福の準備をしているのだから、苦悩の

重圧を受けているとき、これはとくに神の不興の印なのではない、と思って自分を慰めるのがよい」(I. 120. 16, II. 470), 「人間の心が純粹になり、より勝る状態へ思いを留めるのは、主に苦悩があるからである」(I. 120. 14, II. 470), と苦悩を位置づけ、そこに積極的な意味を見出そうとする。

苦悩だけではない。現世のすべてが喜んで受け容れるべき対象なのである。すべての人が存在の特権を喜び、憐れみ深い造物主への感謝の念に満たされるのでなければ、いったい何の目的で神の惜しみない手が数限りない喜びを浸透させたのか。「神が贈った祝福を享受すること、それが美德であり従順」(R. 44. 6, III. 239) なのである。

ジョンソンの信仰に関する諸論は、神が与えた恵みを受け容れ、その上で「よき人生」を送るための不断の努力を求める。「道德家が徳の本質を解き明かすまで、有徳になることを待つ必要はない。われわれの義務は、普遍的、究極的な理由は決してわからずとも、そのおおよその結果から明らか」(I. 37. 12, II. 117) だからである。そこでは神や来世の考察も不要なら、倫理の本質は何かを問う必要もない。それは自明なことであり、ただ与えられた義務を実践すればよいのである。したがって、ジョンソンの信仰論は、信仰の必要性という問題から、社会生活における道德的な実践という問題に還ってくる。

## 6. 希望と信仰

最後に、ジョンソンの信仰論と希望論の関係について考えてみたい。ジョンソンの所論では、行為の動機にはすべて偶然が関与する、また行為の結果を事前に知ることはできない、と再三強調されていた。この偶然の普遍的な支配から、未来一般の不可知、不確かさが論理的に推論されていたのである。しかし道德的な真実や真理についての考え方を見れば、彼の趣旨は、行為一般に関する広義の信仰を提唱することではなかったか、と推察することができる。まず彼の主張を確認してみたい。



こういった重大なときにどのような動機で行動を決めたか究明しようとする人は、みなそれが自尊心の告白を許さぬような動機であったと知るだろう。突然激しい欲念に駆られたとか、ある定かならぬ私欲が動いたとか、つまらぬ対抗心だとか、不正確な結論だとか、暗に尊ばれていることだとか、そのようなものがしばしばわれわれの決心の第一原因なのである。なぜかといえは、行動が必要なのに、行動の結果を知ることはできないし、詮索と懸念に対して、あらゆる側面からその根拠を尋ねつくすこともできないからである。(R. 184. 10, V. 204)

ジョンソンの主張の範囲内で言えば、人間の意志決定には、多少とも偶然が関与せざるを得ない。また偶然の関与ゆえに人間は未来の行為の結果を知ることができない。どんな理性的な推論によっても、確かに知ることはできない。理性になし得ることは、たとえば、上の引用のように、人間性の現実を分析することと、意図された行為に対して、なすべき理由や、なすべきでない理由を提示し、予想される結果を描くことだけである。言葉を換えれば、理性の働きは、意志の及ぶ範囲を照らしてみせるだけであり、意志の決心をうながすことではない。ジョンソンは、「決心の第一原因」を、「欲念」「私欲」「対抗心」「不正確な結論」「暗に尊ばれていること」など、「自尊心の告白を許さぬような動機」という、およそ理性の働きとは別なところに見ている。つまり、行為を選択する決意の瞬間は、合理的な判断をこえたある種の思考の飛躍なのである。したがって行為の瞬間も飛躍である。論理とは無縁な飛躍である。意志の決定は欲するところを欲した結果なのである。事実とは意志がのこした飛躍の足跡である。だから、決意と行為の結果は、第三者の目には、つねに偶然の結果と映るはずである。これがジョンソンの現実認識である。

おそらく、ジョンソンが問題としているのは、このような現実の中で、道徳的な行為者としてなすべきことは何かである。偶然のなすがままに任せて未来の夢に溺れることでは断じてない。今現在なすべきことをせずに未来の幸福ばかり願うことでは断じてない。彼の主張は、「決心の第一原因」

が何かにかかわらず、自分にとっての善を志向し、実現に向けて努力せよ、ということなのである。偶然の支配のただ中であっても、いや、偶然の支配のただ中にあるからこそ、結果のよきことを信じるべきなのである。充分に理性を働かせ、あらゆる可能な選択肢を提示した後の決意の瞬間は、偶然に任せた飛躍かもしれない。しかし、結果のよきことを信じ、あくまでもそれを意図して努力をつづけよ、と言うところに、ジョンソンの道德論の真価がある。日常の決意と行為においても、信ずべきたしかな未来をもつべきなのである。広い意味での信仰が必要なのである。

ただし、ジョンソンの真意は、もっと宗教的である。すなわち、もし論理的な意志決定が不可能なら、「自尊心の告白を許さぬような」つまらぬ動機ではなく、権威ある神の教えに身をゆだねて、その配剤を信じて努力をつづけよ、と言いたいのだ。理性の声に耳を傾ければ、きっと理性はそう教えているはずだから、理性が教える真実を受け入れよ、と言いたいのである。そして、ジョンソンの一連の論述を見ると、その狙いは、世俗的な希望を信仰の領域へ引き上げることだということが分かる。つぎの一節を見よう。

卓越を目指す努力に呻吟せぬように、必要なのは (中略) 「衆人の称賛に心をあずけたり、人間の力が授けるがごとき報酬に心を奪われたりせず、より高い可能性に目を上げ、未来と永遠の状態を思念することである」 (R. 118. 13, IV. 269)。

「より高い可能性に目を上げ、未来と永遠の状態を思念することである」とジョンソンが論じるとき、世俗的な卓越への希望は、来世に対する希望と完全に同化して、信仰と見分けがつかなくなる。

いまだ不確かな未来の結果を思い描くことは、現在の行為をうながす力に乏しいかもしれない。それによって無為に生きることをジョンソンは批判していた。しかし現在の行為は未来の希望に一つずつ形を与え、未来は輪郭が太くなるにつれてより強く信じられるようになる。そのとき、名声

など移ろいやすい目的に惑わされずに、真の目標の達成を信じよ、とジョンソンは言いたいのである。未来の希望とその大いなる意味と実現を信じ、それを人生の目標とし、真実とするのである。「宇宙の統治者に認められることを励みとする人にとって、克服しがたい困難などない」(R. 44. 9, III. 241) というように、希望が信仰と一つになったとき、勤勉の徳を見守る絶対者の存在は、現在の行為をうながす強い意志となるはずだからである。

希望論では、理性は現在を思考の対象とし、未来は空想の領域とされていた。しかし、理性が本当の意味で現在を見据えることができるのは、人生の無常を突きつけられ、死を意識することで、空想が跳梁しがちな未来が解消するときだった。しかし、そうではあるが、人間は未来に希望をいだかざるを得ない。ここにジョンソンの思想のアンビヴァレンスがある。が、彼はそれを解決せずに、受け容れたうえで、空想にかえて理性にもとづく合理的な希望を据えるのである。

希望とは信じることであり、信すべき理由をもつことである。未来は不確かだからこそ信じるべきなのである。そのとき、何をどのように信じ、どのような希望をもって実践にのぞむのかが、ジョンソンの関心の的だったと言える。ジョンソンは真の幸福である、合理的な希望を、最大最善の道徳的な真実、すなわち信仰の中に見出していた。

Summary

An Analytical Reconstruction of the Thought of Samuel Johnson  
——On Faith——

ISHII Yoshihiro

In his essays on morality and faith, Johnson deals with the future in a totally different way. In the former, the state of the future, of which 'nothing can be known' (XVI. 112), makes him emphasize the worth of the present; yet, in the latter, he makes 'the future predominate over the present' (III. 37). These contradictory attitudes suggest that an inquiry be made into the relation between his moral principle and faith.

The surveys of his views on learning and hope have shown three main moral interests: the firm belief in persistent efforts which should never be unrewarded; the criticism of human weakness that may cause indulgence in idle hope; and the belief in the rule of chance which motivates human decisions. The third belief is particularly important, for it accounts for his moral principle.

As Johnson repulses any kind of determinism, chance is the major supplier of the goal to pursue. This view prompts him to promote the virtue of industry for success. However, the rule of chance should be a serious threat to his belief, for it may leave the virtue unrewarded. Chance formed his moral principle, yet it may nullify his moral belief.

His moral system may become clear when you understand that faith in the futurity could make his belief sensible. Yet the arguments involved here provide a remarkable aspect of the nature of his faith. He accepts the rule of chance as the unquestionable truth, which logically should be followed by the

uncertainty of the future. But, as far as faith is concerned, he evidently gives an entirely different type of argument. He deals with faith as matters of worth and choice, which should never be unrewarded by God. In this view, to believe in His justice and mercy is to believe in the worth of virtue, and reward is called for as the moral requirement.

Characteristically Johnson takes human nature as a given thing. He powerfully inquiries into humanity, and discerning its unchangeable qualities, tries to lead them to the desirable destination through moral request. He rather accepts the future state to preserve the worth of virtue, than be overpowered by the moral absurdity in the present state, which if he chose otherwise should be entailed by the rule of chance. Morally his inference may be justified, yet logically it may not.

His apparent lack of awareness of the logical problem in his arguments may be explained from his views on truth. He acknowledges two kinds of truth: physical and moral (*Life*, Oxford, 1069). Physical truth is defined as a fact through the observation of the witness, and moral truth as a belief through his sincerity and conviction. The latter is the key to inquiring into the nature of Johnson's faith, because it implies that faith, offered as the worth to choose, is the truth on the strength of sincerity and conviction. Faith is therefore 'the required truth' that rationality has arrived at through a different route from logicity.

To seek for the moral truth in life, he proceeds to interpret the rule of chance, the premise of his moral principle, and comes to a quite interesting conclusion: 'In this state of universal uncertainty, ... nothing can afford any rational tranquility, but the conviction that ... nothing in reality is governed by chance' (V. 205) ; 'This happiness we may expect with confidence, because it is out of the power of chance' (V. 295). The rule of chance has now turned into something essentially different from what he had based his moral principle on-

-something with the definite purposes that are unknown to you.

The conclusion, if given as the unquestionable truth, is disputable, for moral truth contains a logical problem; and also his own criticism of human nature is suggestive: 'He who will determine against that which he knows, because there may be something which he knows not; he that can set hypothetical possibilities against acknowledged certainty, is not to be admitted among reasonable beings' (XVI. 171); 'Of the state with which practice has not acquainted us, we snatch a glimpse, we discern a point, and regulate the rest by passion, and by fancy. In this enquiry every favourite prejudice, every innate desire, is busy to deceive us' (III. 336).

These problems concerning faith will provide a new picture of the formation of his faith. When the rule of God is affirmed as the only possible interpretation of the rule of chance, the willingness to please God by exercising virtue will be the definite purpose of life, which is recognized as moral truth—truth that is assured by sincerity in and conviction of what you believe. This conviction of truth, reversely, requires the powerful rule of God, so powerful that the rule of chance should be even subordinated to it. Chance then is understood as part of the universal order, though reason does not see how. Without this interpretation of the world, in which chance dominates, 'the rational tranquility' is not attainable. As he bans all inquiries into the natures of God and futurity, arguments on faith now turn to good actions in the world.

Though morality and faith have different arguments regarding the future, his realization of its uncertainty will make them one. If an action is more or less motivated by chance, and reason cannot know its result (V. 204), the moment when you decide to act should be a moment of some sort of leap in thought that is foreign to rationality. The action you take is also a leap, and the facts should be recognized as the marks of the leaps. This understanding of reality should require of Johnson, a moralist, a sort of faith in the good

results of actions in general. To persist in the design with a firm belief in success, though it might end otherwise, is the important instruction in his moral essays. He does promote industry, because it is the virtue that God by all means will reward, if not now, in the future state. This is the belief, or the supreme moral truth, in which Johnson is trying to make hope faith.